昴 Subaru 男声合唱団
祝 600 号
ニュースNo.６００
'１７．２．６

コンサート曲（第１部）6曲のレッスンに集中！

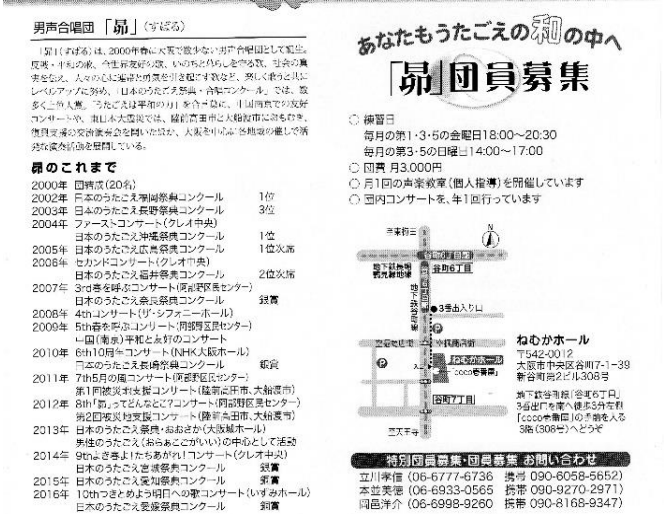
２月３日

□２月３日(金)昴定例レッスン(１８：００～２０：３０)が開催されました。佃さんの体操と千秋さんのヴォイストレーニングのあと、本並先生の指揮で「君死にたもうことなかれ」「想像力」「忘れっぽい人に」「花の歌」「ぶどうとかたばみ」を、伊藤副指揮者の指揮で「このみち」を、そして最後に本並先生の指揮で、２月５日（日）の「がんばろフェスタ」の南部合同曲「人間のうた」をレッスンしました。ピアノは西應静さん。参加者は全３９名でした。

□第 11 回コンサートのチラシも刷り上がり、９５％のメンバーの出席率、レッスン場が狭く感じるほどで、「君死にたもう」では、各パートの、出だしをしっかりと出し、合わせること。音程が途中で揺れないで正しく歌うこと。各パートの主旋律を支える補助音（Uh―A--）の最初のｆｐの出し方、主旋律を消さない音量、そして cresc・decresc・pp・ｐ・ｍｐ・ｍｆ・ｆ・ｆｆのそれぞれに注意して出すこと、言葉の母音・子音をはっきり出すこと　等１フレーズ毎に指揮者はタクトを振っていきました。

若手の BS 小林君が復帰しました！！

昴１１回コンサートコーナー



男声合唱団「昴」（すばる）

「昴（すばる）」は、2000年春に大阪で数少ない男声合唱団として結成。反戦・平和の歌、今社会問題になっている、いのちなどを中心に、社会の真実を伝え、人々の心に響き渡り共感を引き起こす歌など、楽しく歌うことにレベルのアップに努め、「日本のうたごえ祭典・合唱コンクール」では、数多く金賞入賞。「うたごえは平和の力」を合言葉に、市民団体との交流コンサートや、地区大会開催では、隣接豊中市と大阪市に加えて、復興支援の交流演奏会を開いたほか、大阪市内の各地域の催しや諸交流活動を展開している。

昴のこれまで

2000年	団結成（20名）	
2002年	日本のうたごえ祭関西祭典コンクール	1位
2003年	日本のうたごえ長野祭典コンクール	3位
2004年	ファーストコンサート（クレオ中央） 日本のうたごえ沖縄祭典コンクール	1位
2005年	日本のうたごえ広島祭典コンクール	1位次席
2006年	セカンドコンサート（クレオ中央） 日本のうたごえ福井祭典コンクール	2位次席
2007年	3rdを歌えコンサート（西淀川区民センター） 日本のうたごえ奈良祭典コンクール	銀賞
2008年	4thコンサート（ザ・シンフォニーホール）	
2009年	5th春を呼ぶコンサート（用瀬町文化センター） 中国（南京）平和と友好のコンサート	
2010年	6th10周年コンサート（NHK大阪ホール） 日本のうたごえ長崎祭典コンクール	銀賞
2011年	7th5月の風コンサート（阿倍野区民センター） 第1回被災地支援コンサート（陸前高田市、大船渡市）	
2012年	8th「昴」ってどんなこえ？コンサート（阿倍野区民センター） 第2回被災地支援コンサート（陸前高田市、大船渡市）	
2013年	日本のうたごえ祭典・おおさか（大阪城ホール） 男性のうたごえ（おらんおごがいい）の中心として活動	
2014年	9thはぎまよりたちあがれ！コンサート（クレオ中央） 日本のうたごえ宮城祭典コンクール	銀賞
2015年	日本のうたごえ愛知祭典コンクール	銅賞
2016年	10thつきとめよう明日への歌コンサート（いずみホール） 日本のうたごえ愛媛祭典コンクール	銅賞

あなたもうたごえの和の中へ

「昴」団員募集

◎ 練習日
毎月の第1・3・5の金曜日18:00～20:30
毎月の第3・5の日曜日14:00～17:00
◎ 団費 月3,000円
◎ 月1回の声楽教室（個人指導）を開催しています
◎ 国内コンサートを、年1回行っています

ねむかホール
〒542-0012
大阪市中央区谷町7-1-39
新谷町第2ビル308号
地下鉄谷町線（谷町6丁目）3番出口を南へ徒歩3分左側「coco壱番屋」の手前を入る3階（308号）へどうぞ

特別団員募集・団員募集 お問い合わせ
立川孝信（06-6777-6736 携帯 090-6058-5652）
本並美徳（06-6933-0565 携帯 090-9270-2971）
岡邑洋介（06-6998-9260 携帯 090-8168-9347）

「このみち」

このみちのさきには　大きな森があろうよ
ひとりぼっちの榎（えのき）よ　このみちをゆこうよ
このみちのさきには　大きな海があろうよ
蓮池（はすいけ）のかえろ（カエル）よ　このみちをゆこうよ
このみちのさきには　大きな都があろうよ
さびしそうな案山子（かかし）よ　このみちをゆこうよ
このみちのさきには　なにかなにかあろうよ
みんなでみんなでゆこうよ　このみちをゆこうよ

明るい未来に、輝ける明日に大きく一歩を踏み出そうよと、大きく声をかけてくれる詩です。榎やカエルや案山子に呼びかけていますが、これは悩んだり苦しんだり迷ったりしている人間に向けた呼びかけです。弱くて小さな人間ですが、だれかが後ろから声をかけ、背中を押してくれると、前に一歩進みだせるものです。はるか先の明るい未来に期待と希望が見えるものです。

みすゞさんの呼びかけは、きっと「**なにかなにかあろうよ**」と希望を照らしてくれています。時には人から手を差し伸べてもらい、手を引かれて歩くこともあるでしょう。しゃがみ込んでいる人に、大きく声をかけ、立ち上がる力をくれる詩だと思います。そして、一人ではない「**みんなでみんなでゆこうよ**」と励ましてくれています。

新年あけましておめでとうございます。
それぞれが、充実した一年となりますよう
ご祈念申し上げます。 ・・・・・・平成 26 年 1 月・・・・・・　合掌

「全超寺/法話２６０１」より
（全超寺の住職の平成 26 年正月の講話が掲載されていました。
金子みすゞの詩に寄り添ったあたたかなお話です。）

童謡詩人　金子みすゞについて

（「金子みすゞ詩の世界　みすずこれくしょん」より）

1903 年（明治 36 年）山口県長門市仙崎（当時大津郡仙崎村）生まれ。

本名は金子テル。大正末期から昭和の初めにかけ、雑誌「童話」「赤い鳥」「金の星」に投稿し、「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されながらも、26 歳の若さでこの世を去りました。近年、矢崎節夫氏の努力により埋もれていた遺稿が見つかり、「金子みすゞ全集」（JULA 出版局）が出版されました。彼女の詩は、自然の物すべてに対してやさしく、深い思いやりがあり、多くの人々のこころに大きな感動を呼びおこしました。現在では、教科書や副読本にも掲載され、幅広い年代の人たちに愛されています。

2003 年には、彼女の生まれ育った長門市仙崎に「金子みすゞ記念館」が完成しました。

金子みすゞ年譜

1903（明治 36）	4 月 11 日、山口県大津郡仙崎村（今の長門市）に、生まれる。本名テル。
1910（明治 43）	瀬戸崎尋常小学校入学。
1916（大正 5 年）	大津郡立大津高等女学校（今の山口県立大津高等学校）に入学。
1923（大正 12 年）	下関の母のもとに移り住み、まもなく上山文英堂商品館内支店で働き始める。 6 月初めごろよりペンネーム「みすゞ」で投稿を始め、雑誌『童話』に「お魚」「打出の小槌」、『婦人倶楽部』に「芝居小屋」、『婦人画報』に「おとむらい」、『金の星』に「八百屋のお鳩」を発表。『童話』誌

	上で、選者の西條八十に認められ、 若き投稿詩人たちの憧れの星となる。
1926（大正 15 年）	2 月に宮本啓喜と結婚。11 月に一女をもうける。
1927（昭和 2 年）	童謡詩人会に入会。『日本童謡集』（童謡詩人会編）に、女性としてただ一人掲載をされる。下関駅で西條八十に会う。
1928（昭和 3 年）	『燭台』に「日の光」を発表。
1929（昭和 4 年）	娘ふさえの言葉を採集した『南京玉』を書き始める。
1930（昭和 5 年）	2 月 27 日正式離婚。3 月 10 日、上山文英堂内で死去。享年満 26 歳。

金子みすゞ

『赤い鳥』、『金の船』、『童話』などの童話童謡雑誌が次々と創刊され、隆盛を極めていた大正時代末期。そのなかで彗星のごとく現れ、ひときわ光を放っていたのが童謡詩人・金子みすゞです。

金子みすゞ（本名テル）は、明治 36 年大津郡仙崎村（現在の長門市仙崎）に生まれました。成績は優秀、おとなしく、読書が好きでだれにでも優しい人であったといいます。

そんな彼女が童謡を書き始めたのは、20 歳の頃からでした。4つの雑誌に投稿した作品が、そのすべてに掲載されるという鮮烈なデビューを飾ったみすゞは、『童話』の選者であった西條八十に「若き童謡詩人の中の巨星」と賞賛されるなど、めざましい活躍をみせていきました。

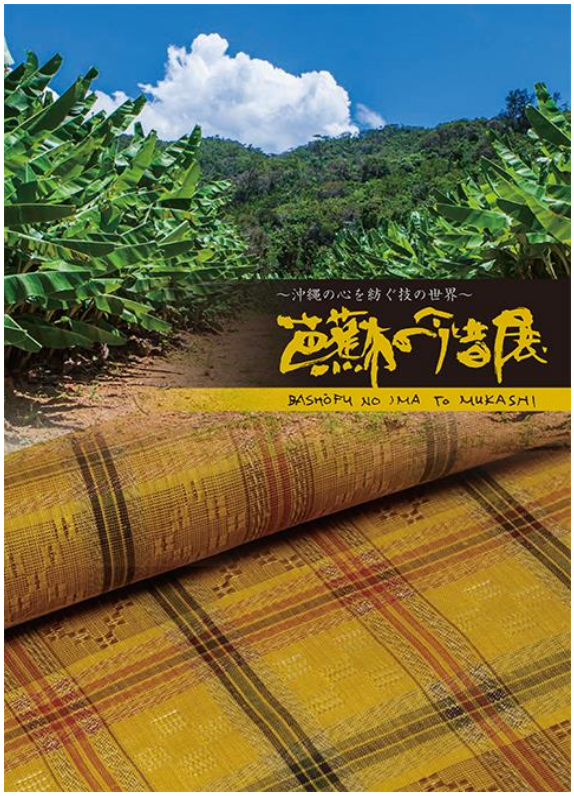
ところが、その生涯は決して明るいものではありませんでした。23 歳で結婚したものの、文学に理解のない夫から詩作を禁じられてしまい、さらには病気、離婚と苦しみが続きました。ついには、前夫から最愛の娘を奪われないために自死の道を選び、26 歳という若さでこの世を去ってしまいます。こうして彼女の残した作品は散逸し、いつしか幻の童謡詩人と語り継がれるばかりとなってしまうのです。

それから 50 余年。長い年月埋もれていたみすゞの作品は、児童文学者の矢崎節夫氏（現金子みすゞ記念館館長）の執念ともいえる熱意により再び世に送り出され、今では小学校「国語」全社の教科書に掲載されるようになりました。

天才童謡詩人、金子みすゞ。自然の風景をやさしく見つめ、優しさにつらぬかれた彼女の作品の数々は、21 世紀を生きる私たちに大切なメッセージを伝え続けています。

「山口県長門市 金子みすゞ記念館」ホームページより

芭蕉布　　作詞：吉川安一　作曲：普久原恒勇



「うたごえ新聞」2016年12月5日号より

ジャーナリスト伊藤千尋の

こうして生まれた日本の歌 ㊱

沖縄本島から石垣島へ飛行機で飛び小さなフェリーに乗ると、竹富町の鳩間島に着く。周囲4キロもなく歩いて1時間ほどで一周できる小さな島だ。面積は1平方キロもない。

のちに沖縄本島の大学教授となった吉川安一は、この島で育った。沖縄歌謡詩集団のメンバーとして村の音頭や隣組の歌を作詞したが、沖縄そのものを歌い上げようと思ったとき頭に浮かんだのが鳩間島だ。

▲海と空の青が溶け込むような日本最南端の有人島、沖縄の波照間島

母親が芭蕉布を織ろうと毎夜、機織り機を踏んでいた音を思い出した。6人の子を養うために母は必死だった。芭蕉布とはバショウの葉の繊維で織る布である。昔は自分の家に芭蕉を植えて糸を紡ぎ、布を織った。芭蕉布には母のぬくもりがこもっている。

沖縄の生命力と誇りを込めた「芭蕉布」

「芭蕉を擬人化し、世界に向かって、人情豊かなこの島に来てくださいと招きたかった」と吉川は作詞の心を語る。冒頭に出る海と空の青さは沖縄の自然とともに生命力を表現した。当時は沖縄の復帰前だ。「我した島」に伝統文化を持つ沖縄の誇りを込めた。

作曲した普久原恒勇は三線の名手に育てられた。大阪で生まれ28歳のとき沖縄で創作活動を始めて間もなく、この歌詞が持ち込まれた。わずか30分でメロディーができたという。

いかにも沖縄を思わせる明るいメロディーだ。「我した島沖縄」の部分は古くから沖縄に伝わる「ドミファソシ」から成る旋律で、沖縄色を出した。

1965（昭和40）年に琉球放送のラジオ番組で「徹底したふるさと沖縄の賛歌を」と流された。1978年にNHK「名曲アルバム」で取り上げられると全国に広がった。今では沖縄県民が何かにつけて歌う。「もうこの曲は民謡と呼ばれていい」と普久原は言う。

吉川が「この島に来てください」と願った理由の一つは、人口が少ない事だ。鳩間島の住民は今年7月で43人でしかない。人口が1000人を超えることが住民の悲願だ。

学校も小、中学校が合体した町立鳩間小中学校が一つあるだけ。生徒の9割は他府県からの留学生で、ほとんどがいじめなどで不登校になった子である。島では数人単位で家庭に分かれ里子として生活する。都会からいきなり島の生活になって戸惑う子も、やがて自然の中で活き活きし自己表現するようになる。

その一人が民主主義を守ろうと訴えるSEALDsの中心メンバー奥田愛基君だ。福岡県の中学校でいじめに遭いネットで検索して単身、鳩間島に来た。沖縄の自然が彼のエネルギーの基になったのかもしれない。